

令和6年度

広島市平和記念式典訪問団 レポート集



令和6年8月6日 長野県 駒ヶ根市

目 次

「広島へ行って感じたこと」	赤穂中学校 3 年	赤羽根 小春
「認めあう」	赤穂中学校 3 年	北原 幸明
「想いを繋ぐ」	赤穂中学校 3 年	高倉 茉紘
「核兵器廃絶と恒久平和」	赤穂中学校 3 年	丸山 統基
「平和への一歩」	赤穂中学校 3 年	柚木 美陽
「平和への想い」	東中学校 3 年	村田 悠



令和 6 年度広島市平和記念式典訪問団の皆さん

「広島に行って感じたこと」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3 年 赤羽根 小春

今から 79 年前の 1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分「ドーン！！」という大きな音とともに一発の原子爆弾が広島に落とされました。

原爆資料館では、その当時の写真や被爆者の方々が描いた絵や遺品など、本当にあった出来事なのかと目を疑うようなものをたくさん見ました。その中で特に印象に残っているのは「人影の石」と「弁当箱」です。人影の石は、銀行の前の階段に腰かけていた人の近くで原爆が落ちたため、逃げることもできず腰かけていた部分がそのまま影のように黒くなって残ったものです。弁当箱は建物疎開の作業をしていた当時中学 1 年生の遺体とともに見つかったもので、中に入っていたご飯は真っ黒に焦げていました。階段に腰かけて銀行が開くのを待っていたり、作業をして疲れた後にご飯を食べている様子が目に浮かんでいつも通りだった日常が一瞬にしてなくなってしまったということを感じました。

また、資料館一階に「地球平和監視時計」というものがありました。そこには、広島への原爆投下からの日数を最後の核実験からの日数が表示されていました。2024 年 8 月 6 日の時点で原爆投下から 28,855 日、最後の核実験から 84 日でした。私はその 84 日という短さにとても驚きました。79 年前からずっと核兵器廃絶を呼びかけている人が大勢いるにもかかわらず、まだ核実験を行っている国があることに驚き、言葉を失いました。広島市長や県知事がおしゃっていたように、被爆者の平均年齢は 85 歳を超えています。私達は原爆が風化されないよう当時の様子や被爆者の思いを後世に語り継ぎ続けなければいけないと思います。

平和への誓いで、子供代表の「願うだけでは平和は訪れません」という言葉が心に残っています。平和記念式典を見るたび、原爆は二度とおこってはいけないと思うことしか出来ませんでした。今回多くのことを知り感じることができました。願うだけではなく過去を知ることの大切さや命や平和の尊さを周りの人達にも使えていきたいと思っています。今回の広島の平和記念式典への参加は、私の平和の第一歩になりました。

「認めあう」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3 年 北原 幸明

日本に住んでいるみなさんは今の平和な生活があたりまえだと思いますか。あたりまえのように友達がいる、あたりまえのように家族がいる、あたりまえのように生まれ育った豊かなふるさとがある、あたりまえのように平和がある。しかしあたりまえではなくなった目を背けたいくなるような過去がたしかに存在したのです。

昭和 20 年 8 月 6 日、午前 8 時 15 分。原子爆弾が投下されました。原子爆弾は人々の生活と命を奪ってしまいました。私は被爆したわけでも、当時生きていたわけでもありません。ですが体験していないから自分には無関係だ、という考えでは絶対にだめです。過去を知り、過去を認めるのです。平和は過去を知り、認め、また立場、人種、置かれた環境が異なるとしても、それぞれを理解しあい認め合うことから平和は始まってくと私は思います。

私は広島市平和記念式典で小学校 6 年生の平和への誓いを聞きました。そこで「願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和を作っていくのは私たちです。」という言葉が心に残りました。この先未来、平和な世界を創り上げていくのは私たち。難しい事をする必要はない。ただ人を思いやり 人を大切にしていけばいいと考えます。

平和資料館を見学し、目を背けたいくなるような資料がたくさんあり、私は絶対に忘れてはならないなと思いました。また平和を忘れてはいけないと思いました。平和を、命を忘れた人は人として可哀想です。世界は過去それらを忘れてしまいました。今も忘れてしまっている人も世界でいると思います。ですがゆっくりでいいです。それぞれが手を取り合って平和へ歩みを進める事ができるでしょうか。できます。一度過ちを犯した人はもう同じ過ちを繰り返さないと思うからです。世界が一つになり平和という一つの目標に向かって手を取り合うべきです。これができるのは未来を持つ人々の特権であり、権利であり、義務だからです。

私たちも私たちにできる事を考えていくべきです。みんなで共にがんばりましょう。

「想いを繋ぐ」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3 年 高倉 茉紘

平和記念式典での平和への誓いを聞いて、戦争に関わりがあった土地に生まれ、そこで過ごしたかどうかで、ここまで大きく戦争に対する気持ちの差が子供ながらに生じてしまうことに衝撃を受けました。私が長野県で生まれ育っているからこそ、受け取れる戦争への想いがあるのではと考え、今回の学習を振り返ります。

平和への誓いの朗読を、大人ではなく小学 6 年生が行っていることに私は平和への強い意味を示していると感じました。被爆地である広島の小学生在が、真っ直ぐな眼差しでスピーチをしている姿が私は忘れられません。老若男女問わず、日本中の人々がもう一度平和について考えるきっかけとなる、かけがいのないスピーチだと感じました。

初めて訪れた平和記念資料館では、被爆者の遺品や遺書、写真など、にわかには信じ難い出来事を目の当たりにし、私は言葉が出ませんでした。数ある遺品の中、最も印象的だったのは、「弁当箱、水筒」です。説明文ではお弁当を楽しみに出かけたが、それを食べることはできなかったと記載されていました。私はそれを見て、あの頃の広島にはいつも通りの日常があり、いつも通りの笑顔があったのだらうなと思いました。その幸せな日常を一瞬にして奪った原子爆弾の恐ろしさを改めて再認識しました。その他にも苦しい姿が沢山あり、戦争や空襲を起こさないために自分が何をすべきなのか考えさせられました。

原爆ドームは自分が想像していたものよりも、遥かに損傷が激しく、原子爆弾の恐ろしさをその姿で表しているように思えました。その姿から形を変えず、今まで残されてきたことは確実に意味があり、そこだけ 1945 年 8 月 6 日から時間が止まっているようでした。いままでもこれからも、原子爆弾を語り続けていく貴重な建物です。

今年で原爆が落とされて 79 年もの年月が過ぎました。こんなにも戦争に触れ、考えた 2 日間は初めてで、私にとって大きな成長になりました。戦争を実際に経験したことにある人が年々減ってきています。そんな中でこれからの社会をどう彩っていくのか、平和で笑顔あふれる毎日にしていくのか、変えられるのは、今生きている私たちです。過去にあったことから目を背けず、平和への感謝をこれからも感じていきたいです。過去の人々が作り上げた世界に笑顔で生きていきたいです。

「核兵器廃絶と恒久平和」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3 年 丸山 統基

原爆について理解を深めるにつれ、当時の広島を想像することができました。原爆は、「地獄」を作り出しました。何の罪のない多くの人々を肉体的に、精神的に苦しめました。

平和記念資料館には目を疑う資料がありました。私も知っている日常にある物全てが原爆によって痛々しく変形していました。人々が核兵器の特徴である、爆発の威力の大きさや放射能に苦しんでいました。特に、放射能は生き残った人々にも苦痛を与え続けました。体中に異常をきたし、衰弱させ、亡くなり、又、症状のない人もいつ発症するのかという恐怖の中、生きました。

そんな街を地獄に変え、人々を苦しめ、絶望させる原爆が二度と使われないために私たちにできる事とは何でしょうか。私は今まで核兵器廃絶は理想。核兵器を持たない日本にできる事はない。そう考えていました。しかし、平和記念式典の広島県知事湯崎英彦氏のあいさつを聞き、考えが大きく変わりました。特に私の心を動かしたのは、「真の現実主義」という言葉です。湯崎氏は「いわゆる現実主義者は、＜中略＞力には力と言う。核兵器には核兵器を。しかし、そこではもう一つの現実はいくつも無視されています。」と語りました。核兵器保有には絶大な効果があるというのも現実。しかし、絶大な効果の理由は、その兵器が多くの人々の命を奪い、多くの人々を苦しめるものであるという現実があるからです。この現実を無視する者を現実主義者と呼べるのでしょうか。「私たちは真の現実主義者にならなければなりません。」

又、湯崎氏は核兵器廃絶に向けた取り組みにあらゆる資源が不十分とし、現在、核兵器維持増強などに使われている資金や人員などを十分の一、核廃絶に向けた取り組みに投入すれば、核廃絶も具体的に大きく前進すると説明しました。この話はとても具体的に現実的でした。私はこの話を聞き、核廃絶のビジョンが見えました。もちろん、それは簡単な事ではありません。ですが、多くの人々の核廃絶への強い思があれば必ず達成できます。今回、広島に行き改めて核廃絶の重要性を感じました。そして、この重要性を周りの人にも知ってもらいたいと思いました。

核廃絶に向け、「過ちは繰り返しませぬから」という誓いを基にまず自分が、真の現実主義者になり、そして「真の現実主義者」を増やしていきたいです。

「平和への一步」

駒ヶ根市立東中学校 3 年 柚木 美陽

快晴の空に蒸し暑いいつもと変わらない朝。79年前のこの日もこのような朝だったのでしょか。1945年8月6日と9日にアメリカ軍が投下した原子爆弾は、広島・長崎の沢山の人の命、肉親、日常と数えきれないほどの大切なものを奪っていきました。私がこの活動に参加したきっかけは、小学生の頃に「はだしのゲン」という漫画に出会ったからです。そして日本の戦争や原爆がどれほど過酷なものだったかに感銘を受け、作者の伝えたかった思いをこの目を見て、聞いて、感じたいと思い参加しました。記念式典には海外から110カ国の方々、全国から訪れた方々など老若男女問わず沢山の人が参列されていました。式典が行われている中で、献花する人、平和宣言をする小学生、壇上で挨拶をする人、音楽を奏でる吹奏楽部。一人一人から私たちに向けての強い平和への思いが伝わってきました。その中で、すごく印象に残っている言葉がありました。それは、「平和のために私達でもできること」「被爆者の平和への思いを受け止め、核兵器廃絶への決意を発信していったほしい」と2つです。どちらの言葉にも、「自分で行動を起こそう」という願いがこもっています。これを聞いて私は聞いたことをそのまま言葉や文にして周りに発信する方法他にも、自分たちの特技を活かし発信していくことで、言葉の壁を乗り越え世界の人々に原爆について知ってもらえるのではないかと思います。

原爆資料館に展示されていた写真、絵、遺品の悲惨さは自分の想像を絶しました。後遺症に苦しむ子供たちの写真、原爆の苦しみや恐ろしさを描いた絵、焼け焦げボロボロになった黒いお弁当、跡形もなく消えた広島の町。その中で資料や本で見たことがあったものも、実際に自分の目で見ると全く違うように見え、79年前のあの日の様子がそこにあるように感じ、その場にいてもとても悲しく苦しくなりました。資料館を訪れてみて「はだしのゲン」の印象が変わり、この作品に対する思いが更に強くなりました。作者の中沢啓治さんが五感で感じた原爆投下からの一瞬一瞬、感じた思い全てが漫画の中に詰まっているように思います。

「戦争は二度と繰り返さぬよう」と被爆者の方々を初めとする沢山の人が戦争への、核兵器廃絶への思いを世界に発信しています。この事を「自分には関係ないこと」だと思わず、被爆国「日本」で暮らす一人として、真剣に向き合い実際に目を見て、耳で聞いて肌で感じ、より多くの人に広島で起こった原爆の恐ろしさを知ってもらい「平和」な未来へ一歩ずつ踏み出していきたいです。

「平和への思い」

駒ヶ根市立東中学校 3 年 村田 悠

僕は、8月6日に広島の平和記念式典に参加してきました。以前に一度、原爆ドームや原爆資料館を訪れたことはありますが、広島平和記念式典には参加したことがありません。駒ヶ根市が募集した広島平和記念式典訪問団の一員として参加させていただくことに感謝の気持ちでいっぱいです。

平和記念式典で一番心に残ったことは子ども代表の平和への誓いです。

「願うだけでは平和は訪れません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」という一文が自分の心に強く刻まれました。この一文を言っていた男の子が、強い口調でハキハキと言っていたからでもあります。そして、ふと思ったことがあります。「平和」とは、一体なんだろうと思ったのです。その答えは、平和記念資料館にありました。資料館には、被爆された方々の遺品とその詳細が書かれてあったり、被爆した後のメッセージが書かれてあったりしました。どれも当時の広島がどれだけ地獄だったのかを教えてくださいました。中でも、被爆前後の広島市街を上から見た動画が平和へのヒントでした。原爆が投下された直後、一瞬にして建物が崩れ落ち、きのご雲が街を覆い、広島市街は焼け野原になってしまいました。まさにこれは平和から「地獄」へと姿を変えています。僕が思う「平和」とは、いつも通りの生活が送れていることだと思います。改めて自分のやりたいことができていることに感謝したいです。

僕は、他にも魂の叫びとガラス片が突き刺さった壁が忘れられません。

「妹は木の葉のように焼かれてしまいました。」という一文や、原爆の強風によりガラス片が壁に突き刺さっているものがありました。これらを見た時、これ以上同じ過ちを繰り返してはいけないと強く思いました。今、広島と長崎に落とされた原子爆弾の比に値しないくらいの強烈な爆弾を持っている国があります。また同じ過ちを繰り返さないためには、僕たちが平和の尊さを伝えていかなければなりません。平和な世界にするには、願うだけではいけません。過去に起こった出来事を学び、世界の核に対する考え方に対して自分の意見を持ち、自分から平和への一歩を踏み出すべきです。

現在、被爆者の平均年齢は85歳となっています。当時の様子を直接聞ける機会も少なくなってきました。だからこそ、広島で8月6日の出来事を学び、感じて、命の重みについて語り合い、平和の尊さを伝えていきましょう。



平和記念式典の様子

原爆資料館の見学の様子



平和の子の像にて祈りを捧ぐ



平和への誓い

目を閉じて想像してください。

緑豊かで美しいまち。人でにぎわう商店街。まちにあふれるたくさんの笑顔
79年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。

「ドーン！！」という鼓膜が破れるほどの大きな音。

立ち昇る黒みがかった朱色の雲。

人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で、まちは埋め尽くされました。

ある被爆者は言います。あの時の広島は「地獄」だったと。

原子爆弾は、色鮮やかな日常を奪い、広島を灰色の世界へと変えてしまったのです。

被爆者である私の曾祖母は、当時の様子を語ろうとはしませんでした。

言葉にすることさえつらく悲しい記憶は、79年たった今でも多くの被爆者を苦しめ続けています。

今もなお、世界では戦争が続いています。

79年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、

明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。

本当にこのままでよいのでしょうか。

願うだけでは、平和はおとずれません。

色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

一人一人が相手の話をよく聞くこと。

「違い」を「良さ」に捉え、自分の考えを見直すこと。

仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。

私たちにもできる平和への一歩です。

さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。

平和記念資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。

そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合いましょう。

世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。

令和6年（2024年）8月6日

こども代表

広島市立祇園小学校 6年

広島市立八幡東小学校 6年

かとう あきら
加藤 晶
いしまる ゆうと
石丸 優斗

広島市平和記念式典訪問団レポート

発行 令和6年 11月

企画編集 駒ヶ根市 総務部 総務課

長野県駒ヶ根市赤須町 20番 1号

電話 0265-83-2111（代表）